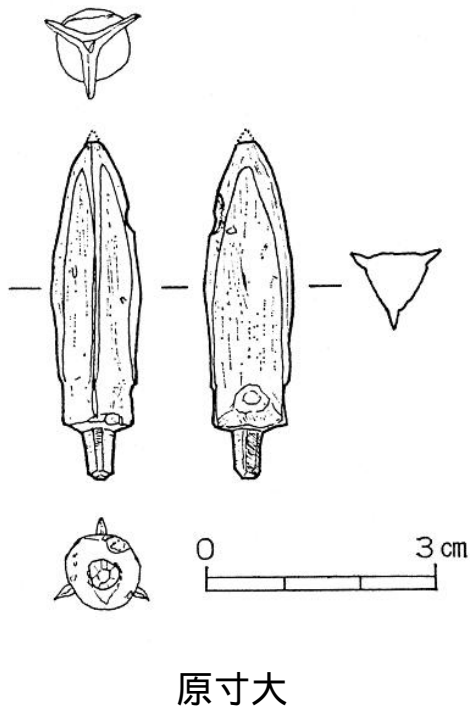


芦屋市指定文化財
会下山遺跡出土青銅製漢式三翼鏃

平成 19 年 3 月
芦屋市教育委員会

【実測図】



このたび市指定文化財となった青銅鏃は、現存の長さ 4.4 cm、最大幅は 1.18 cm を測る大きさです。長さ 3.75 cm、径 1.0 cm 弱の断面円形を呈する鏃身に、径 0.3 cm、残存長 0.65 cm の断面円形に近い茎部を付加させた形式のものです。鏃身部には、さらに三角形の各頂点から三方に狭翼が取り付けられ、いわゆる三翼鏃の形態をなしています。重量は 14.3 g で、見かけより重いものです。昭和 30 年代に遺跡の中で採集されました。

青銅三角鏃はそれが起源する中国中原では、戦国後期からみられ、秦・前漢にかけて作られています。弩(ど・いしゆみ)と呼ばれる発射装置(弩機)により飛ばされる武器(矢尻)であり、本来、日本列島に舶載される必要性のないものです。しかし、近年島根県において木製弩機の一部とみられる模倣品も出土しており、パーツ(部品)のレベルでは弩自体が今後日本で出土することも考えられます。その招来の事情に関しては、不明な点が多く残されています。年代研究自体も中国・朝鮮・日本共に遅れています。

漢式三翼鏃の伝来時期でもっとも注目されるのは、長崎県原の辻遺跡例です。弥生時代の中

期初め頃から前半の時期と考えられています。会下山遺跡の事例は、遺跡との共存関係で弥生時代中期後半～後期前半の時期と推定されています。いまのところ、戦国と確実に時間的關係をもつ弥生時代前期の例がなく、中期初頭を最古として列島への到来をみ(九州)、中期後半～後期にかけて東の世界へと動くようです。こうした動向は、さらにスライドして列島の東へと流入していく貨泉・五銖銭など中国貨幣の分布状況とも多少類似しているといえるでしょう。模倣三稜木製鏃が弥生後期を中心に確認されていることも、文物の交流を考える上でおもしろいものです。材質を木製品にしてでも、三角鏃を作ろうとしたものがあるからです。

会下山のムラへの流入の時期は、弥生時代中期末、中国前漢・後漢王朝交替期がもっとも想定しやすく、今から約 2000 年前にこの芦屋の土地に伝わったようです。銅・スズ・鉛 3 者が原材料の金属で、その合金が青銅(ブロンズ)です。この近辺での青銅器は国産の銅鐸や銅戈などがあり、典型品が教科書にも登場しています。

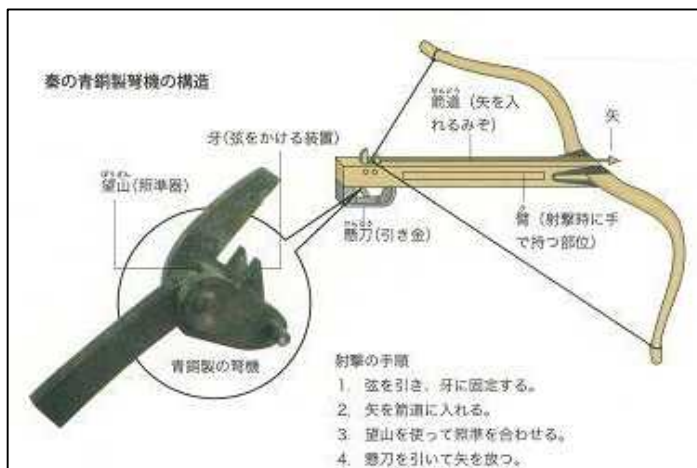
三翼鏃の全国的な出土例をながめると、九州では長崎県壱岐原の辻遺跡(1例)、福岡県福岡市クエゾノ遺跡(4例)、福岡県那珂川町安德台遺跡群(1例)、南西諸島では沖縄県宇堅貝塚(1例)、読谷村宇座の浜屋原貝塚(1例、2006年出土)、四国では香川県角山遺跡(1例)、中国地方では島根県出雲市古志本郷遺跡(1例)など、類品は極めて限られたものです。

その出土傾向は、分布に偏りがみられず、西日本の列島各地に広がりを見せていますが、大陸との直接交渉が考えやすい壱岐島や北部九州、南西諸島(沖縄本島)に中心があること、会下山遺跡例のような典型的な三翼銅鏃が少なく、むしろ三稜鏃の比重が高いことが分かります。

三翼鏃の中でも会下山遺跡例ほどの典型的な形態のものは今のところありません。

近年、三稜鏃など朝鮮楽浪土城F地区などでは、二枚重ね鑄型などの存在も推測されており、会下山遺跡例の鑄造法なども中国本土の生産工程とともに今後解明されることと思います。

日本列島内での舶載中国製武器としての価値は非常に高く、日本と中国の交流の歴史を東アジア世界の中でたどる上に欠くことのできない考古資料といえましょう。芦屋市民の誇る“宝”として、未来に受け継いでいきたいものです。



稲畑 耕一郎 監修 劉煒 編著

伊藤 晋太郎 訳

『図説中国文明史』4 秦漢

雄偉なる文明 2005年 創元社
から転載